

令和 5 年 5 月 21 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19H01255

研究課題名(和文) 日琉諸語の有標主格性に関する基礎的研究

研究課題名(英文) A preliminary study on marked nominative dialects of Japanese and Ryukyuan

研究代表者

下地 理則 (Shimoji, Michinori)

九州大学・人文科学研究院・准教授

研究者番号：80570621

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、大まかに言って以下の2つの大きな成果があった。有標主格を程度問題として捉え、それを有標主格性と呼んだ時、日琉諸語は大きく2つの方言類型に区別できることがわかった。東日本方言は有標主格性を欠き、逆に無標主格性が強い無標主格タイプであるのに対し、西日本・琉球諸語のほとんどは有標主格性を強くもつ有標主格タイプである。上記の類型に際して、それを裏付ける実証データをさまざまな方言から得られた。特に、補助期間中のほとんどを占めたコロナ禍による行動制限(すなわち現地調査に関する制約)下において、既存の談話資料の整理が進み、それをもとに統計的な観点から有標主格性を考えるという視点が得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来、世界的に僅少で、その存立基盤について詳細がよくわかっていなかった有標主格という格体系について、日琉諸語の方言データが有益であることが示された。そもそも、これまでの有標主格の類型論において、日琉諸語データは全く注目されていなかったが、本研究によって日琉諸語にもこのような格体系が存在すること、さらに(有標主格を程度問題として考えれば)さまざまな方言がこの特徴を有することが示された。研究成果の中には英語で書かれた書籍やペーパーも多く、これらによって、上記の事実を広く世界に知らせることができたと考ええる。

研究成果の概要(英文)：The major outcomes of our study can be summarized as follows. First, by taking the notion of marked nominative to be scalar, i.e. as a matter of degree, it has been made possible to discuss various Japonic dialects in terms of marked nominativity and compare them, which finally yielded two major types of marked nominativity: unmarked nominative type, which subsumes eastern dialects, and marked nominative type, which subsumes western dialects and Ryukyuan languages.

Second, our study has been successful in obtaining various kinds of empirical data from various dialects which support the forementioned typology. In particular, the restricted freedom of conducting in-person fieldwork due to covid-19 forced us to conduct the thorough research on existing material such as recorded texts, and it turned out that such data would give us powerful statistical evidence that supports our typology of marked nominativity.

研究分野：言語学

キーワード：言語学 言語類型論 格 情報構造 方言研究

1. 研究開始当初の背景

本研究の目的は、琉球諸語および本土諸方言（以下、日琉諸語）を対象に、言語類型論で大きな注目を集めつつある有標主格(marked nominative; Dixon 1994)という格配列パターンに着目して、その共時的バリエーションの実態を記述する基礎的な研究を行うことである。格配列(case alignment)とは、自動詞主語(S)、他動詞主語(A)、目的語(P)のうち、どれとどれを同じように格標示するか(すなわち「揃える(=alignする)」か)を問題にする概念である。格配列という見地から類型化を行うと、ASを同一に扱い、Pを別扱いする対格型(AS/P)、SPを同一に扱い、Aを別扱いにする能格型(A/SP)、3つを全て同じにする中立型(ASP)、全て異なる標示にする三立型(A/S/P)、Sの格標示が「A的なS」(動作主S, SA)と「P的なS」(被動者S, SP)に分裂する活格型(ASA/SPP)などが主要な格配列パターンとされる。有標主格は対格型の一つである。通言語的にみて一般的な対格型は、ASを無標にして、Pを格標示する格標示パターン(有標対格)であるが、有標主格はASに有標の格標示を行い、Pを無標(格標示なし)とする。このタイプは琉球諸語に極めて広範に見られる。

本土方言でも、西日本(近畿から九州)の多くの方言は、対格標示をほとんど行わないか、行うとしても特殊な要因(目的語が動詞に隣接しないなど)に限定される一方で、主格標示が徹底される(Shimoji 2018a)。類型論的に見た時の有標主格の本質は、対格型であるのに対格標示よりも主格標示が目立つ、という、標示の逆転現象である。この意味で、西日本方言も、有標主格に類するタイプ、あるいは有標主格に、ごくわずかな有標対格の性質が合わさったものと考えられる(Shimoji 2018a)。もちろん、与那国語のように、そもそも対格標示のすべを持たない言語と、西日本方言のように、ヲやバ(後者は九州方言)、目的語末音素の長音化(例:広島方言)など、対格標示が存在するが、主格標示に比べて明らかに生じにくい言語を、一括りにすることには慎重にならねばならない。これらを同一のタイプにするのか、あるいは有標主格と有標対格の連続体を想定し、そこへの位置付けを考えるべきなのかは、本研究で議論する。以下ではひとまず、両者を合わせて有標主格と呼ぶことにする。有標主格は世界的にはきわめて稀であり、1.1節で述べるように理論的には存在自体が「想定外」とされる(Handschuh 2014)。この「想定外」を検証する研究が近年盛んになってきているが、有標主格がかなり広範に見られる琉球諸語や西日本方言は、これらの類型論で一切議論されることがなかった。本研究は、世界で初めて、有標主格の類型論に、日琉語族の貴重なデータを提供するとともに、有標主格を想定外とする現在の理論モデル自体を問い直すきっかけを作る基礎研究として位置付けることができる。

2. 研究の目的

有標主格の言語は希少であるから、現時点で一番必要な研究は、有標主格とみられる個別言語の実証データの詳細な報告と多角的な分析である。これまでのところ、有標主格はアフリカ、パプアニューギニア、北米西海岸に集中していることがわかっている(König 2006, Handschuh 2014)。しかし、上記の欧米主導の類型論的研究において、有標主格が日琉諸語にも見られ、かつ琉球諸語では最も広範に見られるタイプであるという事実は全く把握されていない。一方、国内の記述研究でも、申請者を中心とする琉球諸語の研究を除き、有標主格はそもそも問題にされることがなく、具体的にどの方言に分布するかという基礎的な記述データに乏しい。上記を踏まえ、本研究では以下の3つの問いを設定する。

- (1) 日琉諸語において、有標主格はどこからどこまで分布しているのか？
- (2) 有標主格の共時的存立基盤は何か？(すなわち、どのような意味機能があるのか？)
- (3) 言語類型論で明らかになっている他言語の有標主格との共通点・相違点は？

3. 研究の方法

本研究では、上記の問いに対し、それぞれ研究期間内に達成すべきゴール(以下で矢印の先)を設定する。

- (1) 日琉諸語において、有標主格はどこからどこまで分布しているのか？ 琉球諸語については、申請者が、これまでの個別方言の記述の成果に基づき、奄美語、沖縄語、宮古語、八重山語、与那国語の記述データを整理する。本土方言については、東北(青森方言、福島方言)、関東(埼玉方言、東京方言)、中部(愛知方言)、北陸(富山方言)、近畿方言(大阪方言)、中国方言(広島方言、出雲方言)、四国方言(愛媛方言)、九州方言(福岡方言、長崎方言、宮崎方言、鹿児島方言)の記述データを収集する。冒頭の(概要)で述べたように、琉球諸語のような有標主格と、本土方言のような、相対的な意味で対格標示が生じにくい有標主格をどう類型化していくかについて明確化する予定である。
- (2) 有標主格の共時的存立基盤は何か？(すなわち、どのような意味機能があるのか？) 本研究の代表者である下地理則が提案している日琉諸語の(多くの方言における)格標示に関

する仮説「脱主題化仮説」を作業仮説として、情報構造の観点から、主格の機能を再検討していく。

- (3) 言語類型論で明らかになっている他言語の有標主格との共通点・相違点は？ 有標主格が見つかる地域（アフリカ、北米西海岸、パプアニューギニア）のそれぞれの記述文法及び関連文献をまとめ、それらと対照する形で、日琉諸語の有標主格の特徴を明らかにしていく。

4. 研究成果

本研究は、まず(1)の観点から、どの方言に有標主格が見られるかを調べていく過程で、有標主格をこれまでの類型論のように「ASが有標、Pが無標」というシンプルな定義で考えるのはそれほど有益ではないということに気づいた。すなわち、「ASが有標になりやすく、Pが無標に傾きやすい」という方言は数多くあり、これらを無視して「有標主格ではない」と片づけることで得られることは少なく、むしろ有標主格を程度問題として捉え、上記のような方言も広く考察対象にすべきであるとの結論に至った。

これを有標主格性と呼んだ時、日琉諸語は大きく2つの方言類型に区分できることがわかった。東日本方言は有標主格性を欠き、逆に無標主格性が強い無標主格タイプであるのに対し、西日本・琉球諸語のほとんどは有標主格性を強くもつ有標主格タイプである。これまでの類型論でいうところの有標主格に合致する、本研究でいう「狭義の有標主格タイプ」は琉球諸語、特に沖縄語にほぼ限定されることもわかったが、これを含め、有標主格タイプの言語にはさまざまな共通点がある。例えば、主節のガ・ノの Differential Subject Marking が、九州と琉球、そして広く西日本に（化石的に残る場合も含め）見られることがわかった。

また、上記の類型に際して、それを裏付ける実証データをさまざまな方言から得られた。特に、補助期間中のほとんどを占めたコロナ禍による行動制限（すなわち現地調査に関する制約）下において、既存の談話資料の整理が進み、それをもとに統計的な観点から有標主格性を考えるという視点が得られた。興味深い点は、有標主格性を有するからと言って、そのシステムに内在する「欠点」（すなわち、目的語の標示が貧弱であること）を補うような特徴が実証できなかったという点である。例えば、有標主格性を有する言語は目的語の位置が他の方言に比べて固定されている可能性や、あるいは目的語の有生性に自由が利かない（ほぼ無生物に限られる）といった可能性が考えられたが、それらは全て実証できなかった。つまり、相互識別という観点でシステムを分析することに、そもそもの問題がありそうだ、という我々の研究の出発点が誤りではなかったことが示された。

ただ、それ以降の研究は、コロナ禍におけるフィールドワークの制限もあり、進めることができなかった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 下地理則
2. 発表標題 日琉諸語の格体系の多様性の記述と説明モデルの構築を目指して
3. 学会等名 日本語文法学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 久保蘭愛
2. 発表標題 ロシア資料における格助詞 の機能
3. 学会等名 九州大学国語国文学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 久保蘭愛
2. 発表標題 甌島方言の二格・バ格標示の形容詞
3. 学会等名 日本言語学会第159回大会ワークショップ
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 白岩広行
2. 発表標題 東京の大学で方言教育を実践する 記述研究の立場から
3. 学会等名 第5回実践方言研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Otsuki, Tomoyo and Shiraiwa Hiroyuki
2. 発表標題 Attempts to describe a mother tongue in Aomori and Fukushima, the northeastern region of Japan
3. 学会等名 The International Year of Indigenous Languages: Perspectives (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 竹内史郎・下地理則	4. 発行年 2019年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 183
3. 書名 日本語の格標示と分裂自動詞性	

1. 著者名 Matsuoka, Aoi, Hiroshi Miyaoka and Michinori Shimoji	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Research Institute for Languages of Asia and Africa	5. 総ページ数 81
3. 書名 Proceedings of International Symposium Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia - Poster Session -	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	原田 走一郎 (Harada Soichiro) (00796427)	長崎大学・多文化社会学部・准教授 (17301)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	白岩 広行 (Shiraiwa Hiroyuki) (30625025)	立正大学・文学部・准教授 (32687)	
研究分担者	平子 達也 (Hirako Tatsuya) (30758149)	南山大学・人文学部・准教授 (33917)	
研究分担者	野間 純平 (Noma Junpei) (30780986)	島根大学・学術研究院人文社会科学系・講師 (15201)	
研究分担者	大槻 知世 (Otsuki Tomoyo) (30805205)	静岡英和学院大学・人間社会学部・講師 (33808)	
研究分担者	小西 いずみ (Konishi Izumi) (60315736)	東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・准教授 (12601)	
研究分担者	平塚 雄亮 (Hiratsuka Yusuke) (70757822)	中京大学・文学部・講師 (33908)	
研究分担者	日高 水穂 (Hidaka Mizuho) (80292358)	関西大学・文学部・教授 (34416)	
研究分担者	久保園 愛 (Kubozono Ai) (80706771)	愛知県立大学・日本文化学部・准教授 (23901)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------